

文法学習の重要性について

藤 田 崇 夫

1. はじめに

外国語学習で不可欠な教材の筆頭は「文法書」と「辞書」と言っていかもしれない。まず「英語のしくみ」について書かれた教材、つまり英文法の参考書を熟読することが外国人学習者にとって欠かせない重要な作業となる。現在はもちろん、ここ数十年の学校教育現場では英文法はずっと悪者扱いされてきていると言っても差し支えないであろう。一部の学校や一部の教員の間では文法教育の重要性が生徒、学生に伝えられることはあっても、それは少数派ではないかと推測する。いつになっても「日本人は文法ばかり気にしているから、いつまでたっても英会話ができない」式の不健全な考え方が蔓延しているというのが実情であろう。

中学校や高校、さらには大学の教育現場では今後ますますオーラルコミュニケーション重視の流れが加速することは想像に難くない。文法はオーラルコミュニケーション教育の中で必要に応じて適宜断片的に教えればよいものであるというような中途半端な発想がさらに強まるのではないかと懸念される。

従って、高度な英語力を身につけたい学習者の場合は、個人レベルでの文法学習、つまり文法の自学自習という学習姿勢がこれまで以上に重要になるのではないかと予想される。文法教育を受けるのではなく、自学自習で文法学習をする必要性がますます大きくなるということである。そこで必要になるのが文法の優れた参考書である。以下では英文法の規則そのものについて概説するのではなく、文法学習の必要性、文法書の現状の一端、

文法書の限界などについて述べている。なお、本稿はどちらかというと研究者よりも英語学習者一般、例えば真剣に英語習得に勤しむ高校生や大学生を強く意識して書いたものである。そのような事情もあり、本稿のテーマを論じるに当たり取り上げた言語事実に関連して言及すべき学術文献が少なからずあるが、その多くを割愛したことを断っておく。

2. どの文法がよいのか

文法 (grammar) ということばを簡潔に定義することは難しい。ある国語辞典は「文法」を「その言語体系において、語句と語句とがつながって文を作る時の法則」と定義している。「文のしくみについての法則」と言い換えてもいいだろう。英語という言語の文法は英文法ということになる。しかし、文法という概念をもっと広義に解し、統語論や形態論に加えて、音韻論や意味論をも含めて文法とする立場もある。純粹に学問的見地からの文法概念は時代や学者によって異なるが、本書では伝統的な考え方に基づく文法、つまり「文のしくみについての法則」を文法と呼ぶことにする。

学問的レベルで考えると、英文法にはいろいろな範型がある。最も伝統的な英文法は、18世紀に現れたRobert Lowthなどの文法書にその淵源があるとされる学校文法である。他に主要なものにNoam Chomskyの唱えた生成文法などがある。さらに、理論言語学の発展の中で認知文法、機能文法、構文文法などいろいろな枠組みの文法が生まれている。生成文法は構造主義言語学的方法論の手詰まり状態を打開する形で誕生した文法で、言語研究に革命的進展をもたらしたとしばしば評される。

上記のように、学問的レベルで見ると様々な型の文法があるわけであるが、日本人のような外国人学習者が英語のしくみを理解するためにはやはり伝統文法が最適と考えてよいであろう。生成文法はいまだに発展の過程にあり、絶えず流動的であると思われる。従って、学習者向けの文法書として、生成文法的手法に基づく包括的文法書は誕生していない。つまり、生成文法に関する専門的な予備知識を前提とせず素人でも読める、例えば中学生や高校生が読んでも理解できるというような意味での包括的文法書がまだ生みだされていないということである。

母語話者の言語能力の解明を意図する生成文法の研究は今後も必要なも

のであるが、それはまだまだ学問レベルの話であって、その成果や知識は体系的なものとして一般の学習者が容易に覚えられる形にはまだ整備されていないと言ってよいだろう。

いずれにしても、日本人英語学習者が、仮説から出発する演繹的な方式をとる生成文法についての著述だけをいくら読んでも、例えばTOEICで990点は取れないだろうし、実用英語技能検定1級の試験を突破する実力も身につかないであろう。要するに、最も手っ取り早く英語の基本的なしくみを教えてくれるのが伝統文法、つまり日本人向けに編まれている数々の学習用の文法書なのである。

3. 学問的伝統文法

学問的価値の高い文法書が20世紀以降になって次々に生まれた。例えばOtto Jespersenが著した大著の数々は今では古典的文法書であるが、学問的水準が極めて高く今でもその価値はいささかも減じることはない。以下ではこの系統を受け継ぐ主なものを2点だけ見てみよう。

代表格は1985年に刊行された*A Comprehensive Grammar of the English Language* (以下CGEL) という包括的文法書である。これは単に伝統文法だけでなく、生成文法はじめ様々な言語理論の中で発掘された新知見や言語事実を大幅に、かつ折衷的に消化吸収して記述された学問的伝統文法の頂点と言ってもよい文法書である。出版後30年経った現在でも英語学領域の文献、特に文法関連の学術的な文献には必ずと言っていいほど参考文献にあげられる文法書である。21世紀初頭に刊行された*The Cambridge Grammar of the English Language* にはCGEL出版後17年間の言語学、英語学の研究成果がふんだんに盛り込まれている。英文法の全体像を描いた2,000頁近いこの大著はCGELなどと同様に英語学研究者の座右に置かれるべきものである。

4. 学習文法書

以下では視点を日本人の英語学習に転じてみよう。日本語で書かれた日本人学習者対象の文法書について考えてみる。入門レベルから上級レベル

まで、また受験用のものから学術書性格のものまで夥しい数の英文法の参考書がある。これらの多く、特に比較的精密な文法書は、上掲の *CGEL* などに代表される学問的文法書からの恩恵を多く受けている。ここでは、比較的詳細な学習文法書を2点だけ取り上げる。

名著の誉れが高い『英文法解説』は全18章から成る500頁余りのロングセラーであるが、それぞれの章の見出しは(1a)のとおりである。『要点明解アルファ英文法』はやはり包括的文法書の一つであるが、その構成は全23章で900頁近い重厚な参考書である。(1b)が各章の見出しである。

- (1) a. 名詞、代名詞、形容詞、冠詞、副詞、否定、比較、動詞、動詞の時制、仮定法、受動態、助動詞、準動詞、接続詞、前置詞、疑問文と命令文、話法、特殊構文の研究
- b. 文、名詞、冠詞、代名詞、形容詞、副詞、比較、動詞、時制、完了形・進行形、法助動詞、不定詞、分詞、動名詞、仮定法、態、接続詞、関係詞、前置詞、一致、話法、否定、特殊構文

取り上げられている文法項目や提示の仕方は多少異なるものの、日本で刊行されている比較的詳細な文法書の大半は概ね上掲2冊のような内容を含むものである。この種の詳細な学習文法書を熟読することにより、学習者は英語の基本的なしくみを学べるはずである。

5. 現代英語の“生態”

現代英語の実際の運用においては、(1)のような分厚い本格的文法書を何冊参照しても、また *CGEL* などの専門的な学術書を調べても、説明されていない文法現象が多々あることを、普段から広範囲な読書をしている学習者ならば経験上知っているであろう。どんな文法書にも常に改善の余地がある、あるいは説明が困難なものがあるということについて考えてみよう。

- (2) a. Wow, was she ever funny! (いやー、彼女、超面白かったよ!)
- b. Do I like beer! (ビールが好きのなんのって!)

(2) は両方とも倒置形式による感嘆文である。日常にごく普通に行われる用法であり、小さな子供でも使う英語である。しかし、よく考えてみると、この種の感嘆文は学校の英語教育や相当詳しい文法書も系統的にはあまり教えてくれない構文である。例えば(1)では「特殊構文(の研究)」に倒置の項目があるが、倒置によるこの種の感嘆文についての言及が一切ない。索引で「感嘆文」の項目を調べてみても、倒置形式による感嘆文の説明は皆無である。

残念ながら、日常によく行われるこの種の表現を取り上げて解説する学習文法書は極めて少ない。ちなみに、学習用の英和辞典や英英辞典の中にはbe, do, everなどの項目でこの倒置感嘆文の用例や解説を載せるものがあることも覚えておきたい。例えば『新グローバル英和辞典』のbeとeverにはこの構文に関して簡潔な記述が見られる。

現代英語の実態をもう少し考えてみよう。

- (3) “Don’t worry about him.” Meg hugged her son. “He’s gonna be OK.”
 (「彼のことは心配いらないわ。きっと良くなるわ」とメグは息子を抱きしめながら言った)

(3)におけるhugを、上記のような日本語で考えられる中学生や高校生はかなり英語力があると思ってよいかもしれない。ここではどんな文法的知識が必要であろうか。あるいは、hugの“どんな語法なのであろうか”という視点から考えてもよいだろう。(1)の文法事項の中で考えると、「話法」に関する知識が前提となるであろう。しかし、この2書に限らず、どんなに詳しい文法書の「話法」に関する記述を読んでも、例えば“hugは伝達動詞として使うことができる。なお、その場合の訳し方は「…を抱いて～と言う」となる”などの情報はどこにもないであろう。

CGELなど学問的な文法書の類にも書いていない。そもそもhugという動詞が「話法」の項目で取り上げられることはない。文法書はもちろんのこと、語法などが詳しい上級用の英和辞典のどれを見てもこの種のhugに関する語法注記などはない。これはhugに限ったことではない。この類の動詞は枚挙にいとまがないであろう。この種の用法をもつ動詞を網羅することは、文法書であれ辞書であれ、不可能である。

以下の疑問詞 **what** の使い方はどうであろうか。

(4) Ed: “He was enthusing about the film.”

Al: “He was whatting about the film?”

Ed: 「彼、その映画について夢中になって話してたよ」

Al: 「彼がその映画について、何してただって？」

英語の相当得意な大学生ならば、**whatting** を見て、どうやら **what** に **t** が加えられて、さらに **-ing** が付いているらしいということは理解できるかもしれない。次の反応は「どうして疑問詞 **what** が語尾変化するのであろうか」ではないだろうか。もしかしたら、この大学生が大学のイギリス文学専攻の先生に質問しても、満足のいくような答えはもらえないかもしれない。そのような場合、文法の専門家ならば *CGEL* の類を数冊参照して、その大学生に適切な説明をしてやることができるかもしれない。

最後に名詞の可算性についての問題を考えてみよう。学習者が可算性に対する感覚を身につけるのは容易なことではない。英語英文課程の4年生になっても辞書にある **□** **□** 情報、つまり、ある名詞が **countable** か **uncountable** かという極めて重要な感覚が欠落している学生が少なくないらしい。学習者はある名詞が **□** であるか **□** であるか不安な場合は、まずは辞書で確認するしかない。次の例を観察してみよう。

(5) a. Elephants never forget. (象は記憶力がよい)

b. They were hunting elephant. (彼らは象狩りをしていた)

英語の語感が鋭い高校生や大学生ならば、(5b) の **elephant** は入力ミスまたは英語力の低い外国人学習者が書いた英語だと思って、**elephants** に訂正できるかもしれない。なぜなら、(5a) が示すとおり **elephant** は **□** 用法の名詞と覚えているからである。

しかし、辞書の可算性表示はあくまで運用上の一応の目安であって、絶対的な基準ではないということが英語の複雑さの一端である。(5b) のように、狩猟や銃猟の文脈ではその対象となる鳥獣を表す名詞は、**□** 用法であっても無冠詞単数の形態で用いられることがある。従って、例えば **□** の

lionなども shoot などの目的語になる場合は lion のままでも自然な英語になるのである。

この種の次元の言語事実になると、(1) のような類の詳しい文法書などを調べても疑問は解決しない。また英語教師に質問しても満足な答えは期待できないかもしれない。そのような際には、CGEL のような学術書をはじめ、国内外の文法理論などに関する文献を渉猟することになるであろう。しかし、このような英語の複雑な文法現象を考える際にもっと大切かもしれないことは、ことばというものは本質的にいかにしなやかなものであるかという認識であろう。

6. 冷遇される間投詞

本節では重要品詞の一つであるにもかかわらず文法書の中で最も等閑視されている品詞である間投詞について検討する。間投詞は一般に「文の他の部分とは文法的関係なく文中に投入される語類である」などと説明される。つまり、文中の他の部分または他の文に対して独立の関係にあるということである。それゆえ、他品詞と比べて重要性が低く、周辺の文法事項と片付けられていて、ほぼ全ての文法書で極めて軽く扱われる結果となる。

その証拠に、例えば (1) のような大部の文法書でも目次に「間投詞」は一切出てこない。(1a) の巻末には千数百に及ぶ文法事項の索引があるのに、間投詞は一切無視されている。また、断片的に間投詞についての言及がある文法書でもその記述量は不当なまでに少ない。日本語で書かれた 500 頁を超える分厚い文法書の多くでは、目次にも索引にもこの品詞は出てこない。例えば、900 頁近い (1b) における間投詞の記述量は 1 頁に満たない有様である。

日常的なコミュニケーションでは非常に重要な役割を担う品詞であるから、オーラルコミュニケーション重視の我が国の英語教育の現状を考えれば、本格的な文法書では間投詞に従来の数十倍の紙幅を与えて、その機能について詳述されてよいはずである。しかし、残念ながらそうはなっていない。これほど冷遇されるもう一つの本質的な理由は、学習者に分かりやすく説明・解説するのが非常に困難な品詞だからである。

文法書の執筆者本人、例えば文法の専門家、英語学や英文法等を専門領域とする大学教授などが、例えば動詞や接続詞など説明が容易な品詞を扱

うのと同様に、良質の用例などを豊富に用いて解説するのが上手くできないということが、間投詞がほとんど無視される原因であろうと推測される。実際、英語母語話者並に自然に使いこなすのが非常に困難な品詞であると言える。*CGEL*など学問的な文法書でも間投詞関連の記述は非常に限られているのが実情である。

ここでは詳述できないが、間投詞については文法書などで詳細に説明される必要のある用法が少なからずある。例えば、“Ahhhh!”、“Ohhh, God!”、“Mmmm, I don’t know.”のような単純な例で考えてみよう。どの辞書を引いても *ahhhh*, *ohhh*, *mmmm* という綴りの見出し語はない。*ah*, *oh*, *mm* を表す臨時語的なものであるから、辞書には当然載っていないわけである。

(1) のような参考書に「間投詞の中には他の品詞と異なり、感情の高ぶりを示すなどのために、書き言葉では綴りの一つが繰り返される表記が採用されるものがある」のような簡潔な解説が数行あるだけで、学習者は辞書に当たらずに理解できるようになるであろう。このような初歩的な知識であっても、説明されなくては学習者には分からないことである。なお、間投詞は辞書でもその扱いが非常に手薄になっている項目であることもここで思い出したい。この品詞の難しさの一端を少しだけ見てみよう。

(6) Ted: You seem a little nervous, Sue.

Sue: Nervous? What’s there to be nervous about?

Ted: Well, you’re having a job interview today.

Ted: 「少し緊張してるみたいね、スー」

Sue: 「緊張ですって? 何か緊張するようなことがあるっていうの?」

Ted: 「だって、今日は仕事の面接があるでしょ」

well は間投詞の中では重要項目であるから、上級用の学習辞書では比較的手厚い扱いを受ける場合が多い。数種の上級用英和辞典で見ると、「促し」「訂正」「了承」「譲歩」「安心」「驚き」「躊躇」「思案」「同意」などの範疇で意味用法が説明されている。

しかし、どの辞書を調べても、うまく日本語にできない (6) のようなケースが非常に多くあることを、普段から小説を読む習慣のある学習者なら誰しも経験するところであろう。この文脈における *well* は「というのは」の

ような感じで、前言に対する理由を導入するのに用いられていると考えられる。それを踏まえれば、あとは日本語の問題で、「だって」のようにも訳せることが分かるであろう。wellに限らず間投詞の中には実際には多義的なものが多いが、どの項目を見ても実際の英語運用上のヒントになるような記述はほとんど見られない。

幸い、最近の辞書の中には、ah, oh などごく一部の主要な間投詞については比較的充実した記述が見られるものがある。その種の辞書では間投詞を談話標識という視点でうまく説明するものもある。ただし、適宜用例なども与えられて手厚い扱いを受けるのはah, oh, wellなど重要な項目に限られていて、大部分の間投詞については「ええ、あー、おおー、あの一、おっと」など僅かな訳語が与えられているだけである。

談話標識関連の文献などではwellなどの重要項目がよく取り上げられているので、その成果が辞書に反映されることはあっても、その他のマイナーな項目については、文法書や辞書の著者・執筆者が自信をもって明確な説明ができないというのが実情であろう。文法書でも辞書でも、個々の間投詞について適切な用例を挙げて、詳細な記述が加えられることは今後も当分期待できないであろう。間投詞は扱いが非常に厄介な品詞なのである。特に学習文法書や学習辞典では、間投詞は今後もっともっと光が当てられてよい語類であり、専門的に見ても研究の余地が多く残されていると言えよう。

7. 文法書の限界

ここまで倒置構文、感嘆文、話法、名詞の可算性など、数多くの文法事項の中のごく一部だけ取り上げて考えてみた。しかし、実際には(1)にあるような範疇すべてに、ここで指摘したような類の、つまり日常的に普通に行われている用法であるにもかかわらず、手際よく簡潔に説明できない用法、見落とされている文法現象等が多く残っているということである。

では、学習者は文法書にも辞書にも書いていない文法や語法についてはどのように覚えたらよいのであろうか。いちいち英語の先生に質問することは現実的ではない。さらに言えば、中学校、高等学校、大学、どの教育レベルの教員であれ、大部分の英語教師は当然のことながら英語を完全には習得していないわけであるから、英語の複雑な側面を質問され

ば、答えに窮する場合のほうが多いであろう。結局、学習者本人が個人的に“語感と感性”を根気よく磨くことが英語学習の要諦であろう。

体系的な文法書で英語の規則を一通り覚えたら、あとは豊富で広範囲な読書などを通して少しずつ語感と感性を磨いていくのである。どのような技能についても言えることであるが、基本を学んだあとの応用発展的な部分については経験と勘で覚えなければならない。そもそも、実際の英語運用における応用発展的なことになると、文法書の守備範囲を超えているものが多い。

仮にCGELのような文法書を何冊も繰り返し読んだとしても、英語の母語話者の生得的な言語直感を身につけられるというものではない。英文法に関する高度な知識は増えるかもしれないが、それだけで英語運用能力が飛躍的に伸びるということはありません。英語習得を目指す学習者の場合であれば、基礎基本を学んだあとは、基本的には多量の読書をとおして語感が次第に研ぎ澄まされてきて、英語の母語話者の言語直感に限りなく近づけるのではないだろうか。

8. 今後の文法書の在り方

本節では、日本人学習者向けの学習参考書の進むべき方向性の一端について上記のhugを例に考えてみよう。伝達動詞のようなふるまいをするこの種の動詞の全てを文法書も辞書もリストアップすることはできない。ただし、伝達動詞の特性についての考え方を学習者に伝える創造的な記述は可能である。気のきいた文法書であれば、「話法」の項目で次のような記述を追加するであろう。それだけで伝達動詞の種類の本質を教授することができるであろう。

- (7) 伝達動詞として用いられる動詞の全てを文法書や辞書で扱うことは不可能である。実際には、伝達の意味合いを全くもたない動詞が被伝達部 (Y) を従えることが多い。考え方としては、ある動作 (X) を表す動詞の多くは伝達動詞として用いることが可能である。その場合の訳し方の原則は「Xという動作をしながらYと言う」となる。

基本的には、辞書は個々の語彙を扱い、文法書はその言語の体系を扱う。

体系や総合を扱う文法書は、各文法項目についてもっと普遍的な説明記述が必要である。例えば、「話法」の伝達動詞の場合であれば、(7)のような解説を加えるだけで伝達動詞の本質を一般化できるであろう。どの文法書も例外なく、使用可能な伝達動詞をほんの少しばかり羅列しているだけである。文法書というのは、700頁余りの大著であるからとか、1,000頁を超える学術書であるから、文法のエッセンスが学べるというものではない。ただ分厚ければ有り難いというものではない。限られた紙幅をもっともっと有効利用する創意工夫が不可欠である。

ちなみに、(2)の倒置感嘆文の例に関連して英和辞典における文法的記述について少しく触れたが、比較的上級用の学習辞書には、詳細な文法書にも全く取り上げられていないような相当高度な文法についての精緻な解説を含む項目が少なくないことをここで改めて思い出したい。特に基本重要項目を熟読する習慣のある学習者はその種の記述をしばしば発見するであろう。従って、英語教師は学習英和辞典の特に基本語彙を精読することの重要性を生徒、学生に伝えることを忘れてはならない。

9. おわりに

主に日本人の英語学習という視点から、いろいろな枠組みの文法、文法書の現状や限界、今後の課題等について概略的に論じてみた。英語の複雑な運用の次元になると、応用発展的な文法現象が非常に多く、詳細な学習参考書レベルだけではなく、また学術書でもそれらの全てをカバーするような理想的なものは今後も期待できないであろう。専門的な目で批判的に観察すると改善されるべき点が多々あり、研究の余地がまだまだ多く残されているということである。

文法研究に終わりががないために、辞書と同様に文法書にも完成形というものがない。それゆえ、文法に関する夥しい数の研究成果が国内外の学術誌や研究書に毎年発表されているわけである。仮に、毎年それら全ての文献を読めたとしても、日本人学習者が英語を完全に習得できるわけではないところに外国語習得の難しさがある。

最後に、日本人学習者向けの文法書、特に学習参考書レベルの文法書の執筆者層に関して考えてみたい。例えば純粋に文法理論だけを研究してい

る研究者・学者の中には、学習参考書の類を書くということにあまり関心がない向きもあろう。場合によっては、受験参考書類の執筆は研究業績とは言えないであるとか、そのような書物を書くことは沽券に関わるとさえ思っている向きもあろう。しかし、そのような誤った考え方をしている研究者・学者の中に、もしかしたら、日本の中学生や高校生向けの素晴らしい受験参考書を生み出せる素養と適性を備えた方がおられるかもしれない。そのような学者に、参考書レベルの一般的な文法書でも、受験に特化した参考書でもよいから、ぜひ腕を揮って執筆して欲しいものである。

比較文学・国文学の泰斗である小西甚一氏はその名著『古文研究法』のはしがきの中で以下のように記している。

- (8) これからの日本を背負ってゆく若人たちが、貴重な青春を割いて読む本は、たいへん重要なのである。学者が学習書を著すことは、学位論文を書くのと同等の重みで考えられなくてはいけない。りっぱな学者がどしどし良い学習書を著してくれることは、これからの日本のため、非常に望ましい。私は、学者としてはほんの端くれにすぎないけれど、心がまえだけは、そうありたいと思っている。

超一流の学者の学問研究に対する真摯な姿勢である。よくよく噛み締めるべきことばであろう。小西氏のこの考え方・学問的良心を、英語界に限らずどの研究領域の研究者・学者にも銘記して欲しいものである。

参考文献

- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』 東京: 金子書房。
Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
木原研三・山岸和夫編 (2001) 『新グローバル英和辞典 (第2版)』 東京: 三省堂。
小西甚一 (2015) 『古文研究法』 東京: 筑摩書房。
宮川幸久・林龍次郎編 (2010) 『要点明解アルファ英文法』 東京: 研究社。
Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

(東洋大学非常勤)

kiharakenzo331205@outlook.com